

## 指示語が展開する自己非自己

—距離認知の基層にある動的自己拡張領域の構築—

川 岸 克 己

The Self and Non-Self Expanded by Denotatives:  
Construction of a Dynamic, Self-expanding Area Underlying Distance Perception

Katsumi KAWAGISHI

## 要 旨

指示語は、一般的に言語主体が空間的な遠近距離を直線的に指示する際に用いる語彙と理解されている。しかし、物理的距離のみならず心理的距離によっても分節され、さらには言語主体と対話者との関係を分節するとの理解もある。本論は、指示語の幾つかの現象を含め、包括的な理解のもとに指示語を再定義し、改めて指示語の構造化を試みた。その結果、対人領域と対物領域によって、「わがこと・ひとごと・うちごと・よそごと」に分節され、かつまた指示語は〈われ〉を含む自己領域を〈ひと〉と〈もの〉に拡張させようとする動的な機能である、と結論付けた。

キーワード：指示語、わがこと・ひとごと、うちごと・よそごと、自己拡張、自己非自己

定されることもある。また、指示語は、客観的な、あるいは空間的な位置関係を示すものばかりではない。さらにまた、言語主体の主観的な認識によっては、同じ対象物であっても、こ系、そ系、あ系のいずれでも選択され得る。あるいは、場面指示や文脈指示など、現実空間か仮想空間かによっても指示語は多様な振る舞いを見せる。

こうした多様な指示語の現象については多くの研究がなされているが、本論においては、これらの現象を記述する立場からではなく、これらの現象を生成する本質的な意味と構造を説明することにその目的を定め、整合性のある理論の構築を目指す。その結果、指示語は、話し手の自己領域を「対人」および「対物」との主體的な認識の関係提示をその根本機能とし、その関係を拡張していく意思をもった動的な機能であると結論づける。

## 1. はじめに

本論は、日本語の指示語の体系について、既存の指示語の理解を踏まえつつ、より本質的な指示語の構造について論じるものである。一般的に、指示語は対象物の空間的な位置関係を表現する語彙と理解されている。たとえば、話し手に近いものは「これ」、遠いものは「あれ」、そして中間的なところにあるものは「それ」といった具合である。これらをして、近称、遠称、中称と規定されるのが一般的である。しかし、これらを今少し注意深く観察すると、「それ」は、話し手単独の場面では使用できず、聞き手が存在することが前提となることから、中称ではなく対称として規

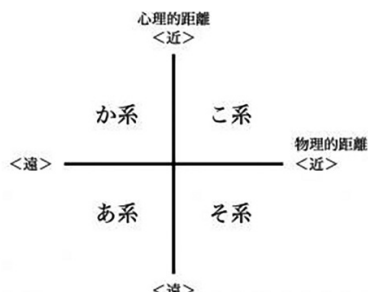
## 2. 先行研究

かつて、川岸克己2015にて、指示語は「物理的距離」と「心理的距離」によって構造化されていることを論じた。指示語の対象が言語主体（話し手）の物理的に近い位置にあるか遠い位置にあるかの分節基準と、言語主体の心理的に近い位置にあるか遠い位置にあるかの分節基準とによって、2種4項に分節されるとした。

この2種4項の分節に従って、指示語「こ系」「そ系」「あ系」をマトリックスに配置すると、当然ながら、3項目しかないのでは、4項目のうち、1項目が空白となる。さきの拙論では、そこに指示語「か系」が位置すると主張した。か系は現代語ではあまり活性のない語であって、限定的な語彙でしか使用されていない。たとえば、「かの有名なピカソ」といった表現である。しかし、現代語においては使用頻度が減ったものの、指示語として認められる以上、その使用の多寡

とは別に、この語を組み入れた構造の体系を構築すべきである。その考えに基づいてまとめたのが、以下の図1の構造である。

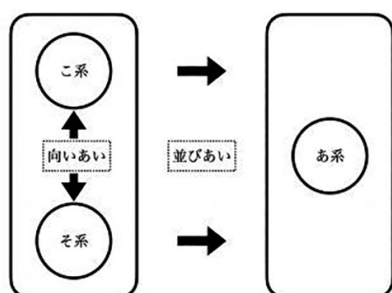
図1 物理的距離と心理的距離による指示語の構造



この構造をさらに広い視点から眺めると、ひとつ問題が生じる。この指示語の構造は、言語主体（話し手）と対象物との関係、つまり、言語主体が対象物をどのように捉えているかの構造である。これはこれで整合性のある理解であるといえるが、言語である以上、話し手のみの場面を前提とするのではなく、むしろ聞き手の存在を常に想定したものでなければならないと考えるのもまた道理である。この指示語の構造には、その視点が欠けている。

渡辺実1996の指示語の理解は、上記のような話し手が対象物をどのように捉えるかといった話し手と対象物との関係表示ではなく、指示語を話し手と聞き手との関係表示の機能として構造化している。そこには大きく2つの関係を提示している。まずひとつは、話し手と聞き手のふたりの場において、話し手と聞き手がそれぞれの空間占有に関して対立的な状況にあり、話し手に近い場合はこ系が用いられ、聞き手に近い場合はそ系が用いられる「向いあい」の関係である。もうひとつは、話し手と聞き手がいるふたりの場に指示対象（対象物）がないとき、その対象物をあ系で表現する。このとき、話し手と聞き手は、お互いが同じ方向に視線を向ける「並びあい」の関係であるとした。これら、「向いあい」と「並びあい」の関係を図で表すと以下ようになる。

図2 「向いあい・並びあい」による指示語の構造



この指示語構造の特徴は、話し手と聞き手との関係を重視し、こ系、そ系、あ系すべてにおいて、話し手と聞き手との存在を前提とし、その関係性を構造化している点にある。逆に言えば、対象物を背景化させ、あくまで話し手と聞き手の関係を前景化させている点が特徴的である。

上記のごとく、それぞれの課題を指摘しつつ上記の2つの構造理解を統合するならば、より包括的な指示語の理解のためには、話し手、聞き手、対象物、これら3つの視点を有した構造であることが求められる。拙論の指示語構造は、言語主体たる話し手と対象物との関係について、物理的あるいは心理的距離によって構造化したものであり、そこには、話し手と対象物のみがある。一方、渡辺実の指示語理解は、話し手と聞き手の関係によって構造化されており、その構造理解には対象物は想定されていない。もちろん、いずれも指示語には必要な条件であるから、話し手、聞き手、対象物、これら3要素によって構造化された理解が求められる。

### 3. 新しい構造

これらの指示語理解を相補的に取り込んだ包括的な構造を構築するために、話し手、聞き手、対象物の3要素を取り入れた構造を新たに模索する必要がある。ここで、先にあげた渡辺実の別の概念「わがこと・ひとごと」の構造理解を参考にしたい。なぜなら、これがそのまま、こ系・そ系、そしてあ系に当てはまるものと考えられるからである。

渡辺実1991では、「わがこと」と「ひとごと」を、まずは以下のように規定している。話し手自身のこととして把握するものを「わがこと」、話し手に関わりなく成立することと把握するものを「ひとごと」とする。ただし、ひとごとは、話し手に関わりなく成立すると規定するのみで、そ系のごとく聞き手の領域のことなのか、あるいは、あ系のごとく、話し手と聞き手から見て、両者の関わりの向こうにある物を指すのかは明示していない。少なくともそ系とひとごととは必ずしも同じ概念ではないことに注意が必要である。

渡辺1991では、たとえば、形容詞でいえば、「嬉しい」は「私は嬉しい」とは言えるが、「彼は嬉しい」とは言えないので「わがこと」となる。逆に、「明るい」は「私は明るい」とも「彼は明るい」とも言えるがゆえに、「ひとごと」となる。また、助動詞「たい」と「そうだ」を対比させ、「私は行きたい」とは言えるが、「彼は行きたい」とは言えないので、「たい」は「わがこと」となり、「私は嬉しそうだ」は言えないが、「彼は嬉しそうだ」は言えるので、「そうだ」は

「ひとごと」であるとする。

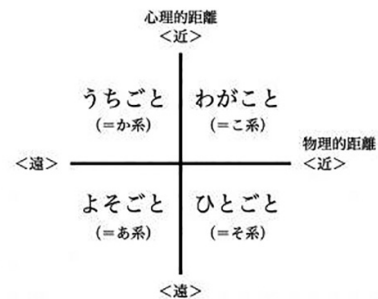
ここでわかるのは、自分に関係するものは「わがこと」であるが、自分に関係しないものは「ひとごと」となる分節である。強いて言えば、そ系は二人称的であり、ひとごとは、それに加え、三人称的でもある。しかし、渡辺1996は、これに加え「よそごと」の概念を提示する。「私は学生だ」、「彼はアメリカ人だ」、「あれは土佐犬だ」などは、「わがこと」と「ひとごと」の対立関係上にはなく、むしろ、その対立を超えた概念であるとした。

この3要素を整理すると、話し手に関係するものは「わがこと」、話し手に関係しないものは「ひとごと」、そして話し手に関係もせず、「わがこと・ひとごと」の対立を超えるものが「よそごと」というわけである。ただし、これでは、「ひとごと」と「よそごと」が、それぞれ「わがこと」との対立関係にあるか、その対立関係を超えた存在であるかの違いは明示されるものの、「よそごと」の概念が議論の埒外に置かれただけで、これら3つの要素を緊密に関係づけた明確に区別された定義には至っていない。

さらにいえば、「わがこと」と「ひとごと」が拮据的な対立関係にあるとするならば、「よそごと」もまた何かと拮据的な対立関係にあってしかるべきである。ここで思い出されるのは、「向いあい」と「並びあい」の関係である。こちらも、先に述べたように、3つの要素が緊密かつ排他的な関係を構築できていなかった。こ系とそ系、こ系とあ系の関係には言及したが、そ系とあ系の関係には言及していなかったからである。したがって、それぞれ不十分な部分を抱えた構造理解を総合して、より整合性のある指示語の体系の構造構築が求められる。

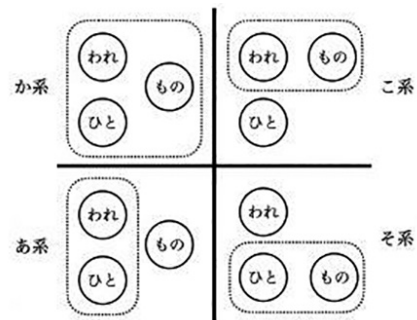
より具体的に言うならば、「よそごと」との対立関係を規定し、安定した構造を成立させることが必要である。よそごとの特徴は、まず、わがこと・ひとごとと別次元の概念であることにある。別次元であるから、「わがこと・ひとごと」とは無関係であるかのように感じるが、より緊密かつ排他的な構造を求めるならば、この「わがこと・ひとごと」の対立関係と並行した対立関係である。さらに、「よそごと」が話し手とも話し手以外とも関わりを「持たない」とするならば、その対立概念は、話し手とも話し手以外とも関わりを「持つ」ものである必要がある。言語主体である話し手と、もうひとりの存在と関わりがあるということは、いわば「私たち」といった一人称複数であろう。これを「わが(こと)」「ひと(ごと)」、そして「よそ(ごと)」の語彙と同種の表現を探すならば「うち(ごと)」と表現し規定することを提案したい。これらを視覚的に構造化したものが以下の図である。

図3 「わがこと・ひとごと・うちごと・よそごと」による指示語の構造



物理的距離と心理的距離によって分節する指示語構造では、まず、3つの指示語体系を、4つの指示語体系として組み直し、言語主体である話し手と、その話し手が認識する対象物との関係を規定した。つぎに、向いあいと並びあいによって分節する指示語構造では、話し手と聞き手のふたりの場を規定した。そして、こそあかの指示語体系に、「わがこと・ひとごと」の概念を導入し、さらに「よそごと」と「うちごと」を加えて、これらを統合する。構成要素となる、話し手、聞き手、そして対象物を、今ここで、それぞれ、<われ>、<ひと>、そして<もの>と簡潔に言い換え、より直感的に理解できる図に置き換えるならば、以下のようになるだろう。

図4 「われ・ひと・もの」による指示語の構造



この図は、4系の指示語で分節し、それぞれにおいて、<われ><ひと><もの>が相互にどのような関係を構築するか、言語主体がどのように、この3つの要素を認識するかをまとめたものである。点線で囲まれた部分の内側が言語主体が自らの領域内のものとして認識するもので、点線で囲まれた部分の外側が言語主体が自らの領域外のものとして認識するものである。

こ系は、<われ>が<もの>を自分の領域のものとし、<ひと>と相対するものと認識する。そ系は、<われ>のみが<ひと>と同じ領域にある<もの>に対して孤立的に相対するものと認識する。か系は、<



われ>が<ひと>とも<もの>とも同じ領域にあるものと認識する。あ系は、<われ>が<ひと>ともともあって、<もの>に相対するものと認識する。

こ系とそ系は、<われ>と<ひと>とを対立させて、対称的な整合性がある。か系とあ系は、ともにくわれ>と<ひと>が共同的であるうえで、<もの>をその領域内に置くか否かで対立し、対象的な整合性を生み出す。

#### 4. 動的な構造

この図の特徴は、<われ>が<ひと>あるいは<もの>と共同領域を形成させようという意思を感じさせるものであることにある。その視点から眺めると、そ系のみが、<われ>をいずれとも関係づけられず、<われ>を孤立させてしまっている。この事態が以下のような特異な現象を発生させることになる。

そ系にみられる<われ>が孤立する事態は、言語主体にとっては穏やかならざる状況である。他の指示語、たとえば、こ系ならば、<われ>は対象物<もの>との共有領域を形成し、か系ならば、<われ>と<ひと>と<もの>の3要素が強力な共有領域を形成し、あ系でさえ、<われ>と<ひと>とで共有領域を形成する。しかしながら、そ系においては、他の<ひと>や<もの>とは共有領域を形成できず、<われ>は孤立したままである。言語主体は、なんらかの形で、人とあるいは物と共同領域を形成することによって、自分を取り巻く世界を形成していこうとしているのである。

このあたりの状況を逆説的に表現しているのが、あ系を用いた二人称の問題である。今日、目の前の相手に対して指示語を用いて呼ぶにあたり、もっとも代表的な語は「あなた」である。しかし、「あなた」は、言うまでもなくあ系の語彙である。二人称は目の前にいる相手に対して用いるのだから、ひとごとの領域である。よって、そ系を用いるのが自然である。実際、そ系を用いた二人称代名詞は存在する。たとえば、「そなた」であろう。また「そち」も考えられる。これらのように、そ系を用いた二人称代名詞は存在するが、現代語で「そなた」や「そち」は、古風な表現であり、一般的に現代語として使用されることはない。

現代語では「あなた」が用いられているわけであるが、実はこの「あなた」には問題が存在する。日常的な場面において、この「あなた」は、二人称の代表的な語とされながらも、実に使用しにくいのである。たとえば、学生が教師に向かって「あなた」と言うことはない。ビジネスマンが会社の上司に対して「あなた」と言うこともない。敬意を表すべき人物に対して

失礼な物言いになってしまうからである。逆に親しい間柄でなら使用しやすいのかというと、実はこちらも使用しにくい。親しい友人に対して「あなた」とは言わない。よそよそしい感じが生じてしまうからである。

このあたりの事情について、米澤陽子2016の調査考察がある。「あなた」は、一般的な二人称代名詞であるが、使いにくく、なぜ使いにくいかの説明も簡単ではない。他にも「あなた」に関する先行研究があるが、それぞれにおいて主張の違いが見られる。「あなた」がフォーマルな語であるとする、敬意を表すための距離を作る感覚は説明できても、上位者に対してなぜ失礼になるのかは説明できない。逆に、場合によっては親しみを込められることなども説明できない。一方、「あなた」は同等者や下位者を指すための言葉だと定義づけるならば、なぜ、ある場合にはかしこまりすぎて突き放すように感じられるのかを説明できない。

米澤2016は、こうした分析考察を進めながら、最終的に「つまり『あなた』は、対話者の社会的要素を表示することなく、話者が聞き手である二人称を絶対的に指し示す語だということである」と結論づけている。社会的要素とは、上下関係や親疎関係を意味するものと思われるが、「絶対的に指し示すだけ」は、ただ話し手と聞き手との間を上下や親疎といったものを抜きにしてただ指し示すものだと解釈してのことだろう。ただし、残念ながらこの考察によっても、なぜ二人称に「あなた」が用いられるのかの問題を解決するには至らない。ただし、興味深い指摘がある。米澤2016は、アンケートの質問文として「あなた」を使用してもなんら違和感がないという指摘をしているが、これは、上記の解釈を適用させれば、容易に納得がいくところではある。

ちなみに、この問題に関して、先の渡辺実1996においても言及があり、二人称の代わりの役職や続柄は、いわば中立的な表現であり、二人称に「先生」や「部長」あるいは「先輩」などと呼称するのは、二人称代名詞「あなた」が使用しにくいことを埋める、代わりの代名詞としての、いわば「代代名詞」と規定している。いわば「あなた」も中立的な表現を目指したものと解釈することができるだろう。

こうした考察を経た上で、もう一度、なぜ、二人称としての「あなた」は、基本的に使用ができないのかもかわらず、これを二人称として使用しようとしたのかを問う。

指示語には、言語主体が託した意図がある。孤立した状態を表現するそ系の状況において、あえてあ系を使用することによって、<ひと>と、それに付随する

〈もの〉とを取り込もうとした。これが本論の考えである。そもそも、あ系とは、話し手である〈われ〉から離れた対象物である〈もの〉に対する情報を、聞き手である〈ひと〉と共同、共通の認識を共有することによって、共同領域を形成し、擬似的な自己領域（「並びあい」の領域）を形成するものであった。こうした、あ系のからくりを応用したのである。言語主体である〈われ〉が、目の前にいる聞き手〈ひと〉を呼称するとき、そ系を用いれば同時に〈もの〉とも対立し、〈われ〉は孤立する。これを避けるために、あ系の語を借用し、そこにあ系の環境を疑似的に創作した。あ系を用いることによって、〈われ〉の対立者としての〈ひと〉を、〈われ〉領域に引き込む。そのうえで、引き込んだ〈ひと〉を分離させ、同時に〈もの〉として、同じ領域からともに眺めることによって、〈もの〉に距離を取っていること、すなわち〈ひと〉に距離を取っていることを表明し、敬意を表現しようとしたのである。

しかし、距離を取ることによって、敬意を表現することに成功する場合もあるが、上位者を〈われ〉の領域に勝手に引き入れようとする認識および行為が、上位者である〈ひと〉に対して失礼にあたる。〈われ〉の領域に引き入れることが失礼に当たらない場合、親しみを表現することに成功する場合もある。しかしながら、同時に〈ひと〉である〈もの〉を自己領域外と認識する時点において、〈ひと〉にとっては、よそよそしさを感じざるを得ない。結局、そ系であるべき二人称に、三人称のあ系を用いることは、齟齬を生じさせざるを得ないものであり、当初の意図を成功させることは困難であったわけである。

もともと二人称を表現する語がないことが、あ系を二人称に用いざるをえない原因であったが、その深奥には、表現することによって対立構造、自己の孤立を自ら表現することを回避したいという意思の存在が逆に認められるのである。基本的に二人称そのものを使用しない。使用することによって言語主体が対立し孤立することを嫌う。裏を返せば、こ系かあ系で、〈われ〉と何かを関係づけて、より大きな自己領域を形成する。それはもっとも困難なそ系の場においても、あ系を転用することによって、自己領域を広げようとしたという言語主体の強い意図を感じざるを得ないのである。

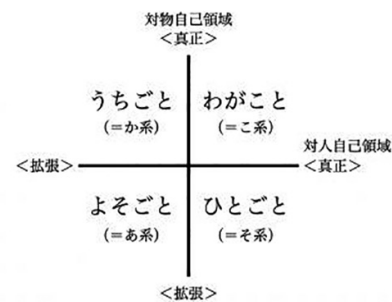
あ系の二人称のみならず、指示語全般に普遍的に存在する指示語の意図は、〈われ〉に、〈ひと〉や〈もの〉を取り込み、〈われ〉の領域を確かなものにしたと認識し、それを表現することであった。〈われ〉が〈ひと〉や〈もの〉と領域を共有し、自己の領域を拡張する。これが指示語のもつ動的な側面であり、構

造である。一見、静的な構造のように見える指示語体系であるが、その枠から外れた振る舞いに垣間みえたのは、動的かつ積極的な指示語の意思であった。

## 5. 自己拡張構造

ここまで得られた知見をもとに、図3で示した「わがこと・ひとごと」および「うちごと・よそごと」の構造に、図4で示した〈われ〉〈ひと〉〈もの〉の3要素の概念を統合し、より一般的な分節基準を明示した構造の構築を試みたのが、以下の図5である。

図5 対人自己領域と対物自己領域による指示語の構造



「わがこと・ひとごと」は、〈われ〉と〈ひと〉とが一對一で相対する関係である。これに対して、「うちごと・よそごと」は、〈われ〉が〈ひと〉を取り込んで自己領域を拡張したものである。よって、横軸（x軸）は、〈われ〉と〈ひと〉、すなわち言語者どうしがその表現において真正であるか拡張されたものであるかによって分節できる。いわば、「対人自己領域」が「真正」であるか「拡張」であるかによる分節である。

一方、「わがこと」と「うちごと」との関係は、いずれも〈われ〉が〈もの〉と共有領域を形成する点において共通であり、これに対して、「ひとごと」と「よそごと」は、〈われ〉が〈もの〉を自らの領域に存在しない点において共通である。しかし、「ひとごと」と「よそごと」においては、その〈もの〉に対する対処が異なり、まず「よそごと」は、あえて〈もの〉を自己領域外に置くことによって、〈ひと〉との共有領域、拡張された自己領域を形成させることができた。しかしながら、「ひとごと」は、そ系による二人称現象にみられるように、唯一〈われ〉を孤立させる状況をなんとか回避したいという意思を有している点に着目し、これもまた自己領域の拡張と位置づけたい。これによって、縦軸（y軸）は、「対物自己領域」が「真正」であるか「拡張」であるかによる分節であるとする。

本論は、以下のように結論したい。指示語の体系

は、自己の領域を拡張することを意図した自己拡張構造である。指示語は、いずれの指示語を用いるか、ある程度恣意的に選択できる。ゆえに、指示語の体系は、自己を拡張させるために、〈ひと〉と〈もの〉とを〈われ〉との共有領域に形成させようとする動的構造である。

## 6. おわりに

神尾昭雄は『情報のなわ張り理論』（1990）において、言語現象を生物学的な視点から分析すべきことを標榜し、言語は自己と他者との間における「なわ張り」を明示するためのものであると結論づけた。本論において、指示語は自己を拡張するための「意思」をもつ、といった表現をしているが、これは決して比喻ではなく、指示語をはじめとした言語現象のさらにその深奥には、私たち人間の存在があるとの考えに起因するものである。言語は、その意思を反映したものであり、指示語の意思とは、とりもなおさず、われわれ人間の意思である。

言語の現象を詳細かつ正確に記述する営為とは別に、言語の存在を裏付ける言語の本質に対する考察もまた意味のあることであると考えている。

## 参考文献

1. 神尾昭雄（1990）『情報のなわ張り理論』大修館
2. 渡辺実（1991）「「わがこと・ひとごと」の観点と文法論」『国語学』第165集
3. 渡辺実（1995）「所と時の指定に関わる語の幾つか―意味論的に―」『国語学』第181集
4. 渡辺実（1996）『日本語概説』岩波書店
5. 川岸克己（2015）「指示語における自己非自己領域と階層構造」『安田女子大学大学院紀要』第21号
6. 米澤陽子（2016）「二人称代名詞「あなた」に関する調査報告」『日本語教育』163号
7. 川岸克己（2022）「自己非自己情報構造としての指示語と文脈指示」『安田女子大学大学院紀要』第27号

[2023. 4. 13 受理]

コントリビューター：宮岸 哲也 教授  
（日本文学科）